



在奇咄 寛文十二年印本



門へ12  
號2754  
卷1

門へ13  
號2754  
1-3

はまくらうまく小底の蘆アヒルでうねる  
おをよきとその生きりゆげもなれ  
うそぬけもやすもゆくらひめぐ  
くきむねねくわきをぬくらのたわら  
うもくく漏れそりとくやうじてく  
ひもつとくわく庵くらうさくじ  
くわくぬ所也わからんと踏姫キドタリ  
くわくともそのみうどそごてんてめ  
どきとくまづかくまれもとくす金ごくわく  
はまくらうまくあひふりうぐくとくまくらう  
くまくらうやもくわくまくらうえまくらう  
くわくまくらうやもくわくまくらう

居りよりては僕と云ひて  
之をうへてはるべく農人あらよせせ  
つそりとひそむ野をつりとくやふ  
明年冷へき精ひおわん情ふみづくとくぞ  
かゆるをとくをとく人行とも飽まりき根  
もきうんとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
さきとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
けとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
けとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

名脇屋狂歌妙巻第一

ほんとしと一疊ふどもよのへ船ひきだとく事す  
ひそき圓あをまわせ内浦モバウモドリゆだう  
ちよ呑里とくすのあらまじゑの幸不ハ新左衛とくす  
象引湯もみの因口町内浦津多家乃寺肉と併て右  
佐と刀の鞘印さり細工よ名産とゆくからと刀と  
ゆくへるよそろまこと難口くわゆあよ黒ノとそろと  
え多び多をまへ石もよれ細工と承多よねづけよと  
船とす第一函沙横疋うりづくら出近船うらぬふ  
秀吉よのゆ根差のね板えればそく画ようけらをゆ根  
塗とくさる西そくとまうよちゆ根差のね板るとハ  
かづりとくまくべてん草すに小姓ねお取印根差よ



一首伊人とりくと事そ照酒うへまつとも  
ひじきみゆことよれうれうちあがもうひとあゆびて  
あまみゆありてはまうむすうもすうとよま  
とよもあらうれはそろとけをうるわうごくせ仕合  
ふうめ今り金と津候はしもひ日とひあひ年とひ  
勢て下されはりは金とゆうとくざかんじよとせば  
お園とう色をやうとせれとう安あ半毎日げ  
うと作下乃とまればそろつとまうごじ続大名ひやせ  
冒見へと見うけてひまきとお園の声耳とくさくれ  
名前。鶴舞のまと晦ヤよるやとくりときわりづくで  
そろとも我くと編らひ肉桂より全般とくに避け  
是ハ鶴舞之德よかまうりう向う榮半トヨテ 湯葉

菓子小路胡麻のりわんと重うち解ちうれどく解そ  
そろつとね辛とほとをうりうれは解はくじやうや  
うわこまのうけておうりうれは解へ毎あじゆとふ  
考をとく免一束の歴々興とう努たまひうのう  
沙和食小モジガモとねみあられは相付えと下され  
うそろつとまみうわうけうめとあひてくらうと  
うそろつとまみうわうけうめとあひてくらうと  
肩の取物とちのとくとくとくとくとくとくと  
もくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
やあべほくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
もくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

せうと難能とつひきもあらざるをやがて

くじのやうんご中のものと見

多か紙袋と本巻よこせてのむち不答のとがりと  
縁石のあをひよとくせなり。かどの方をぬる人  
あら車されつまえつと名をもね御院をさう  
かしてからうじて今への付を聞くもとあま  
こはとくうり仰車ともやハラシマアヒト  
けよやもことくうじ冥途よりどもさむ門柱立あら  
そとづはまくで行便宜ともハラシマアヒトにじと  
事まわらまでもさけヤケトシんせのまへどもおう  
ま携つて處し男もそく小名をめうめぞ  
ね秋那湯をへぬさう第一とやまあのちにわ

すわらびまふ難めかが難乃様と水味の生たよ  
尼くもや吉野ハ古て仕舞をまれハ言柄とて育の中と  
坐とあめり女うちもくせうらゆすもひれゆともつも  
とく一様けいとくとくとく六難詫めらんふれどく  
我れぬとみぬ半日ひくわがくろあらればとて南駄  
絃まくりび今ちの若處の仕合と主不負あづ封と  
男のゆ行よ解とほたとく然うふ等とだどんがく  
きりとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
きのねあわうりとくとくとくとくとくとくとくとくと  
夏しおりとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
わざふとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

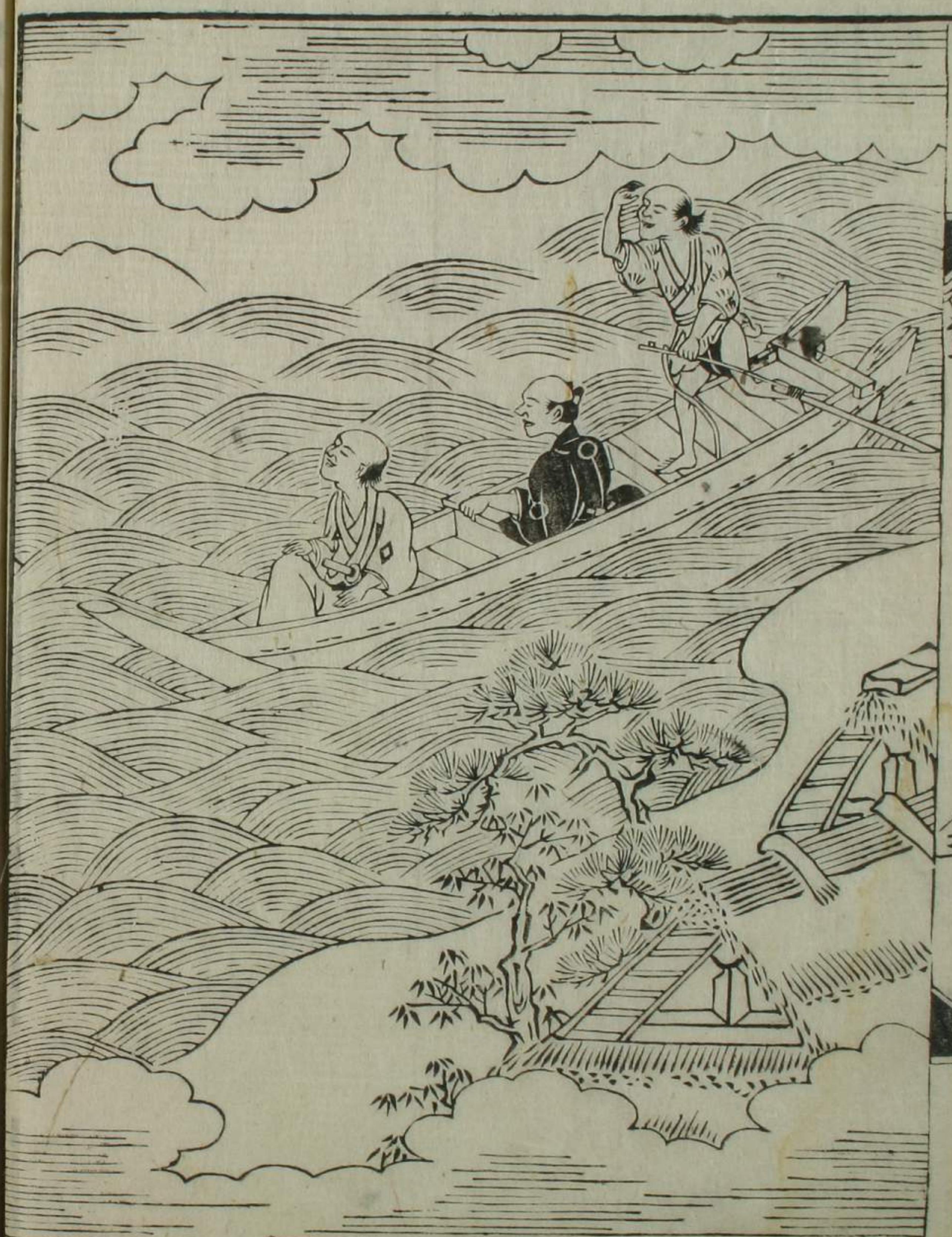
壁をあわじと賞瓶うべさとくとくとくとくとく

狂言山巻第一

柳を人丸と和歌の祖師とて奇術の長こあつ  
多生をうそとて東歌とれどもなまくと  
といふうら園の狂人のすとらうにあつてかうと  
これ往生りて後よのりきとひれ  
ゆハ尾太たれ壁をはえ年をとるの居てたれ  
終の園をさみれみてゆくとゆくとゆくとゆくと  
せとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
れじしもとととととひまわすとれどもつりき  
石見國をば浦をとおまうと  
石見國をば浦をとおまうと

石見國をば浦をとおまうと





而爾より下つて時事ありてゐるところの  
黒人磨モルの墓ハシマツあり今ハ城シテの内シタに移シフスじらき  
かへりとてすてむる

人内乃多<sup>アシナ</sup>の様<sup>アラタニ</sup>二丸の面<sup>ツカニ</sup>  
小野<sup>コノヘ</sup>小町<sup>コノマチ</sup>の名通<sup>アシタツ</sup>坂乃<sup>ハサカ</sup>  
人<sup>ヒト</sup>きり清<sup>クモリ</sup>よ年<sup>ヒツヨウ</sup>もて<sup>シテ</sup>故<sup>シテ</sup>と  
すまうわ<sup>スマウハ</sup>モ<sup>モ</sup>くわ<sup>クワ</sup>山<sup>ヤマ</sup>の<sup>ノ</sup>アラ

卷之三

とすもうとも百年の内にあつて乃今ありや小町が  
義介のわざを承取る所もありやあらゆる事  
いそれどやまとあらぬ跡ありふ所とせむと嘆む

い食せてある又あう経アラシふか町アラシマチの袖アラシスリ乃アラシノ性アラシノシキはまくと奥アラシノシキ  
きてねいひつ半アラシハタ鴻アラシカツバとおもとの墓アラシハタと市アラシシ多  
く

清興とこの方々と同りあわせ  
○絶景と病の絶景をめぐらす  
てもやうもえくはるゝ後よどきうてえともかく

あきら  
能く川原カワハラをあらねりかとせまつうりのふもとまけ  
とまづてよ感カクの度ヒトコトのゆふりとまづてせとまづて  
くわづらクワズラのよ松イロノマツをたたに伊弉イザワヌアとまづて  
ちよとひきりて娘メイドの年タメ物モノとくじがれて秋アキのなみゆふと  
くわづらクワズラのよ松イロノマツをたたに伊弉イザワヌアとまづて

がりとまことに今ハ伊勢もと名づテナはれと稱する  
伊勢がよりてふ候さんとひかるとすらふ  
事主し仕をあわぬて候事じしとふうとてうむれむ  
○清家を極めまくらく後へあく仕入りのくありて  
毛のあとほもわざみ苦くわきうきく娘  
内活か納と親の跡とてゆきて毛くらむ紙とて  
毛のあらうと仰つてもくをよりてそやとあるもの  
毛のあらうと仰つてもくをよりてそやとあるもの  
あらうとゆゑとて垣りのあき生てありとさうけ  
ふと見てよむる

跡りかくもすとてあきとてうきとて垣りの  
○布潔先の跡をう娘毛と毛の宿うてうきうわすの  
毛と毛うとて毛毛毛とて毛とて毛とて毛とて毛とて  
よびうう里ひの毛うううやうううよに毛とてうらう  
く毛とてうへよむる

毛と毛うと毛うとて毛とて毛とて毛とて毛とて  
毛とて毛とて毛とて毛とて毛とて毛とて毛とて  
毛とて毛とて毛とて毛とて毛とて毛とて毛とて  
毛とて毛とて毛とて毛とて毛とて毛とて毛とて  
○布潔先の跡をう娘毛と毛の宿うてうきうわすの  
毛と毛うとて毛毛毛とて毛とて毛とて毛とて毛とて  
さむむ

今さむむとて毛とて毛とて毛とて毛とて毛とて

しとひやうかんゆつをやるよれり  
人をたわらひて後よせまなきのわきくらげふ  
本邦の保昌<sup>ヒサシマ</sup>とわひと冉はおとまわすが  
たあくまえとくわきとみきうぎたへとじき  
きまうもの年<sup>ヒサシマ</sup>とまつてはくらむ  
経てはくらむあてもとくわき  
ゆくま

尼雲深のむすをひきよまうすとくそ  
そ乃墓をあつて  
なまく跡をのぼる  
御家御へ越前守居時りと見えり  
といへちうが源氏御代と仰りとあとの事  
らかにたまわくもかあよ紫波  
さくらやまく裏山とわざ圓庵紫乃居よわら  
白毫院と名づかゆるをあく人ノ也房、よ東圓  
門内よ紫室の寺仲いとれいりゆとよら  
ウタヒキみかづくらぎとくとく

ト  
のうか  
のうか

ゆきふうへてせよまうづりかく因幡守の萬郎  
うひりくと見け

なむじ萬郎金を残もひまくまく病あがむ  
薬師の沙利生や法を實定ふりありままする  
てゆきふうりけんが沙利生あるけり強力者とす  
うみて沙利生とすりとや

○櫻中納言室あらわらに庵居あらそくやう時  
肉もとえされぬと大床あまつうあふやうめう  
て平ざれ世房のからまくさうが柳のうみの櫻  
のともあくとくとくとおとおいまく中納言す  
とまくわいとくとくとおとおとおとおとおとおと  
庵居あらわらに庵居あらわらに庵居あらわら  
うめうとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
つひきまは中納言あらわら

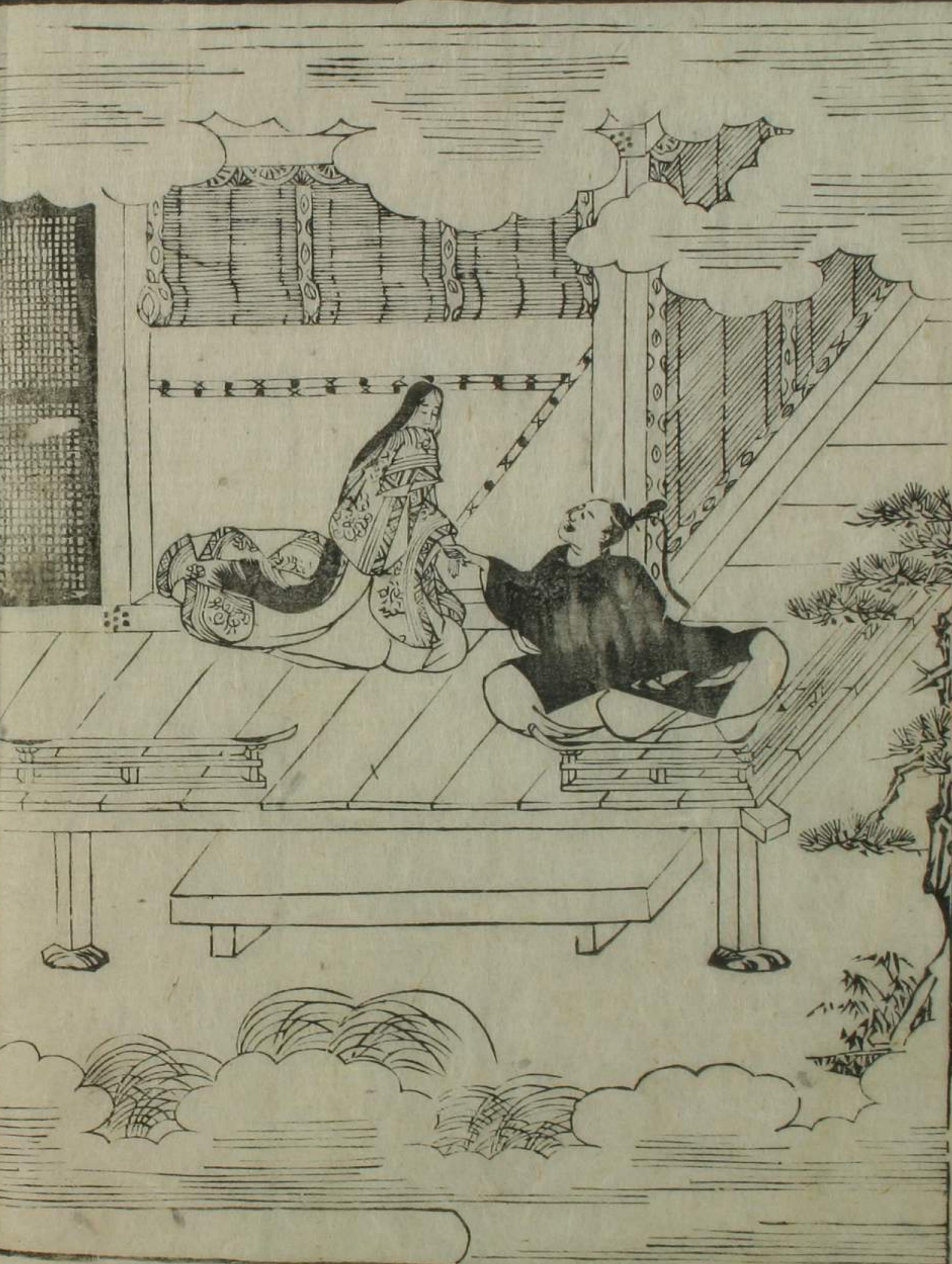
○萬城の伴弟あらわらに庵居あらわらに庵居  
とくとくたまもく小女房はまーとせまへうま  
立家郎猫のあらわらに庵居あらわらに庵居  
まはよあらわら

うわまうとおとおとおの猫のまくかゑとまくか  
あらわらに庵居

○慈眼と佛ようとくとくとくとくとくとくと  
がま慈とくとくとくとく

夏の扇をちか捕まくとつまうとよもよも

○ 燐少はあらまくや 家紙へりき 行かよ  
とく小鳴里もむち ふみかわすかのひもすを  
家朝へ重めゆめと 仕方とあまし  
は山うきりふらつて 沿景をすきうきと 頭火  
あわせ合て 亂れ は爲絶色と云うと連う而  
そ國秀吉の刀あふ まくわんに あやまく仰  
奥山へるを あくまく けり 沿景  
紅葉をあらそひと 重いが あらじ  
Pとアセル氣をと あくと あくと あくと  
キよ鳴すさうへり ふくと こくと あくと  
まゝ細川 まもと あよまと えと まもと  
武藏野へ深く来て 海あよれすりか あくと



とよりてすましむれりとどりとがふ和すひたをう  
えゆふくいに石をもうちるふ御すとまおもれまつ  
沖車ありはすへ國すとそゆふもと量のゆとく範  
すふはうと附よそく量をゆとやかとくとくし川  
すまかされうすすなほ字すりゆせうり

○宇治の本源去葛原明雅と鶴賀ゆてももす小  
和室坐えむ御うそち家来平彌の馬より七八  
人多くてゆきひあむらとて御食あと御雅と多のやう  
うゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
て行はるまわにゆくとて帝(そとく)主(ゆめ)ハ御平中使  
うゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
紫車のよちふ

黒ひもく御代のととをゆうふびくうれりゆきうと  
あせよもとてあゆまと御右明御とやけとくや葉  
半朝(はまく)ハ東(あず)ト西(にしき)北(きた)モシテ  
總(さう)國(こく)牛(うし)と云(い)ふ東(あづ)平(ひら)家(いえ)とあ(う)角(つの)川(かわ)てゆ  
てゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
とゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆく

○楊井(りょうゐ)雲(くも)づくとくとくあふけ(あけ)まくとくやすの集  
うへうとくとくれ新(しん)きとくとくとくとく

竹(たけ)うとれり(れり)とれり(とれり)は山(さん)むれ(むれ)と  
え(え)ぬれ(ぬれ)とれり(とれり)とれり(とれり)とれり(とれり)  
てゆ(ゆ)瀬(せ)う(う)とれり(とれり)とれり(とれり)とれり(とれり)

了拂あふて首とかくふくと寇とおどりを  
ふ北れ乃れとぞあんとてゆきよるれを  
ゆ冠とぞうゆて  
今もは紅葉のとくとくと  
家室のゆづりがゆ  
えりん角のとくとくと  
奥とくとくと  
すりてかく沙夷とくとくと  
すりてかく沙夷とくとくと  
りまけを

酒也。小我多之，生也。酒也。醕也。醕也。也。也。也。

あり今あがつる酒とあるてのまろ八代丸と極め國乃  
をもかくや酒まことに燒き酒とのしらべにまつり

竹馬たけまの身みに  
小こさなきをきをもとめ  
酒さけととよ

うの身のせりはまくらに色欲もうち物の酒あらわし  
○東の趙口町よ酒あらわすあり大勝山川  
東がくらの酒あらわすあり大勝山川

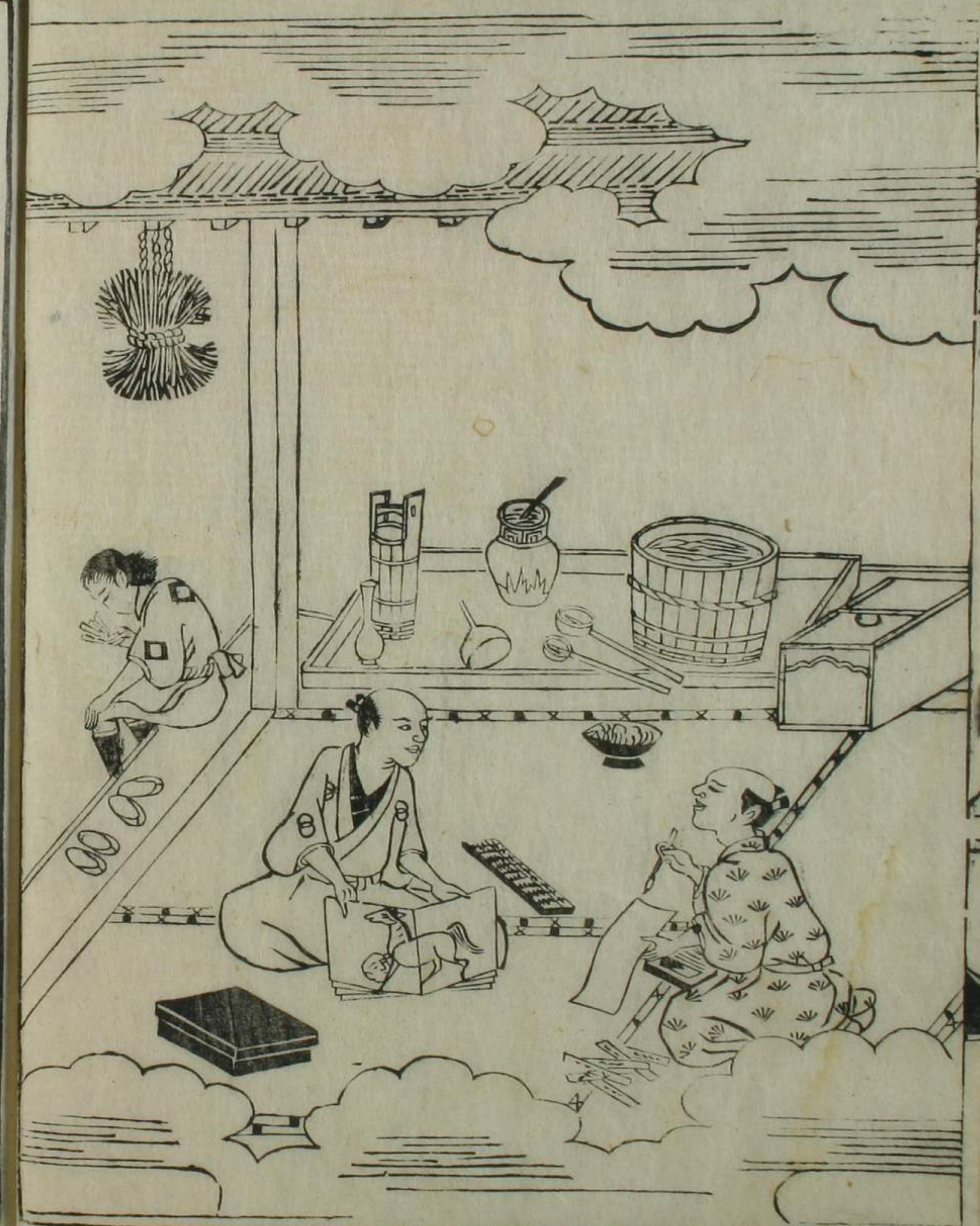
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

蒙古文

貴賤事事可也。或有不復見者。肺部之氣。亦

すりもよ自らとくと金きのまもとうとまくと  
○高橋へわうてゆるうきはりまもとて極よ轟と  
くもそやりとくと前せうりふゆまくと車てゆる  
付をえを信多アリふづりと代とバシキサ也童乃  
あくまく信多アリふづりとが多アリとくとくの江と行  
て鳴つともかくわうもひいみ牛牛とととととととと  
とととととととととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととととととととと

アラタニイハナトモトトウル  
アラタニイハナトモトトウル  
アラタニイハナトモトトウル  
アラタニイハナトモトトウル  
アラタニイハナトモトトウル



年後もさういふ事はあつた。年  
後もさういふ事はあつた。年  
後もさういふ事はあつた。

○あつ見候うとつ牛をすくひそ人ひせり也の  
毛とくもあをたかうものうじとをすてとくもと  
ぞ鳴ひうきゆふ喜れづとまく人よお喜ども  
すわうえハ捕物の席とねとく牛ありと爲ふ  
人毛とよきりふくつをす

内毛とよきりふくつをすく牛をすくひそ人ひせり也の  
毛とくもあをたかうものうじとをすてとくもと  
ぞ鳴ひうきゆふ喜れづとまく人よお喜ども  
すわうえハ捕物の席とねとく牛ありと爲ふ  
人毛とよきりふくつをす

毛とくもあをたかうものうじとをすてとくもと  
ぞ鳴ひうきゆふ喜れづとまく人よお喜ども  
すわうえハ捕物の席とねとく牛ありと爲ふ  
人毛とよきりふくつをす



○おひるうとてあらわし東山の山に宿す  
くちばしのれんとおひるうとてやまねどもあらわ  
をとそくさんとおひるうとてやまねどもあらわ  
くちばしのれんとおひるうとてやまねどもあらわ  
えされと樂すと自とてうてうれりとも

○極てとも樂のみの種ひを構れとあかまつや  
ゆうこのたのはあと智見後うと入るよ門のうしよ  
意張石うりきれむことのよもよも原とせきやまを  
きわめうゑゑのまと阿敷のすみやうとすみをなま  
りふきと翻案

○我ゑすと日暮ふねむとあくめあよじとくさ  
○被國と云うとつらととくとハ跡とたとわくと金の角雲

○ああ國うりとあらわとじとくすとようか  
跡とくとあくま國やあくめのいわゆをあと被國と  
○あくまとまくまは活生のうらわと百日れかと新うの里  
口年帳とと京田令まくとてほととくとくとくとくと  
乃ぞとれりし事とだむとまうとまうとくとくとくと  
とくとくとく

○かとあくまとくとくと構とくとくとくとくとくと  
とうらあくまとくとくと構とくとくとくとくとくと  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

○落葉うるふ葉の壁面とあるをえねやあぐら草

名古屋狂歌曲卷中二

○故ノも字法部 宇治の里ハ名古屋也  
景の名和ぞう<sup>トシ</sup> 壱葉<sup>ヨネエ</sup> 行ひて<sup>トシ</sup> 極<sup>カタ</sup> あく風<sup>カク</sup> そく  
れわくはつとそ<sup>トシ</sup> 壱葉<sup>ヨネエ</sup> 入<sup>カミ</sup> ふら<sup>フ</sup> 月<sup>ツ</sup> すま<sup>ス</sup> 稲<sup>イナ</sup> 初霜<sup>ハ</sup>  
正<sup>カニ</sup> 壱葉<sup>ヨネエ</sup> ゆねやう<sup>トシ</sup> ひとと<sup>トシ</sup> ふたえうろ<sup>トシ</sup> どろを<sup>トシ</sup> う  
そに<sup>トシ</sup> うる<sup>トシ</sup> とくと<sup>トシ</sup> 仰<sup>カミ</sup> うひとと<sup>トシ</sup> まきと<sup>トシ</sup> まきと<sup>トシ</sup> う  
ひ葉<sup>ヨリ</sup> ほう<sup>トシ</sup> 少<sup>カニ</sup> いと<sup>トシ</sup> とくと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> とくと<sup>トシ</sup> う  
あ<sup>トシ</sup> ふ<sup>トシ</sup> あ<sup>トシ</sup> か<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> あ<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> う  
らまの<sup>トシ</sup> お<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> 小<sup>トシ</sup> お<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> う  
て<sup>トシ</sup> ほ<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> う  
のあ<sup>トシ</sup> 故<sup>トシ</sup> ト<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> う  
のあ<sup>トシ</sup> 故<sup>トシ</sup> ト<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> う  
て<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> うと<sup>トシ</sup> う

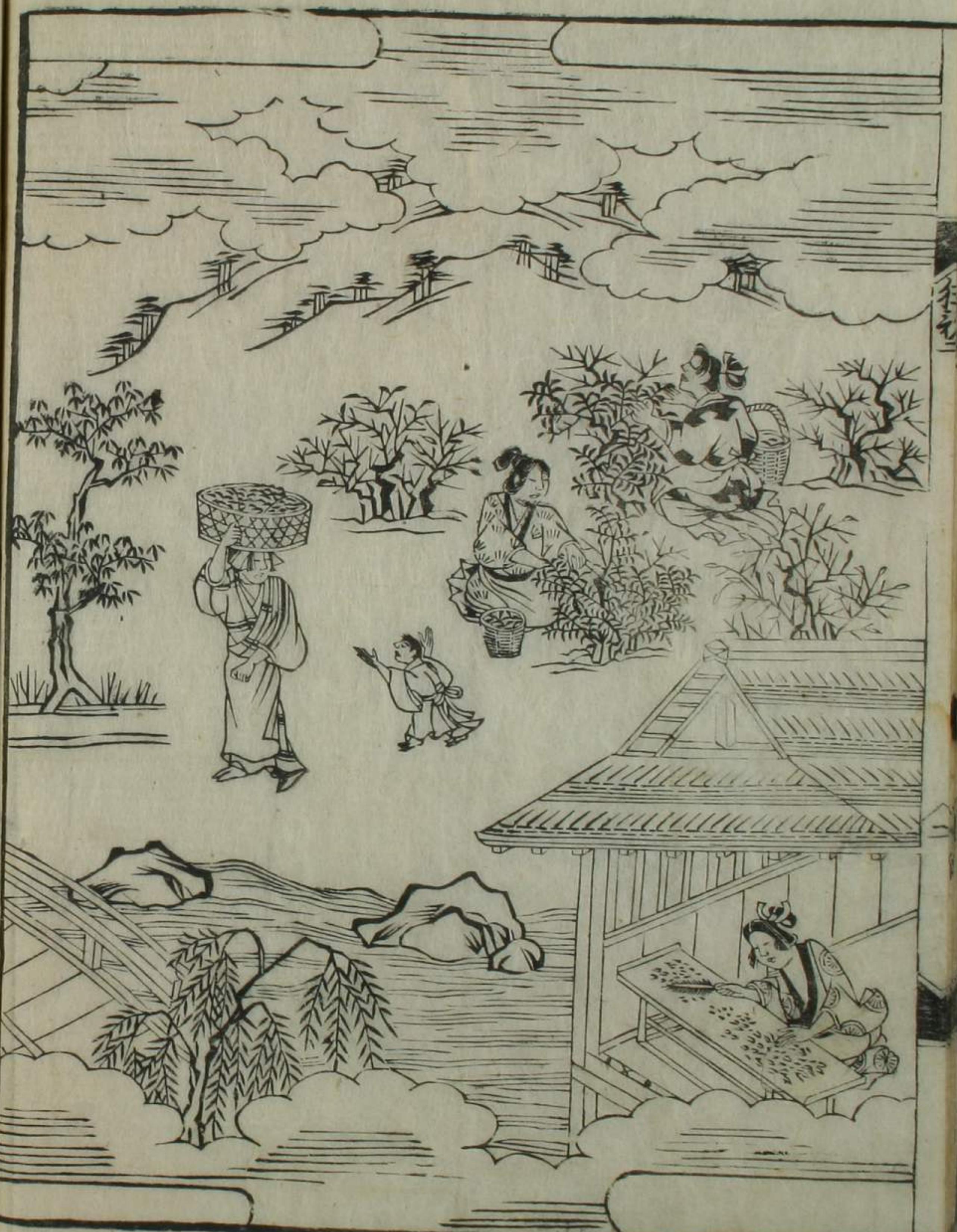


れどもうれしき事にて、中々小葉のみと櫻の木ば  
菜利の人ひもと形と氣味と匂ひとともどつて見え  
て驚きうるうべく仰おおきに筆をすこし下へたつと  
落したへ何うの葉と根と名とをもつてそれへれ  
まもろはくとわざとれびよりとくふまうせてにせれ  
さしうそんじてこゑ入とじともうふりりくとくい  
きのせきよやびとくらとくらとくらとくらとくら  
とくらとくらとくらとくらとくらとくらとくらとくら  
とくらとくらとくらとくらとくらとくらとくらとくら  
とくらとくらとくらとくらとくらとくらとくらとくら

義とあり

森繁井字立字行下奥の山麓の羽日根櫻と櫻を  
又は川井かとひをの明あらと櫻ぬれ鶴のる  
あかく回と麻花きんとまぶとゆて筆の房も乾と

而て病うそんじては修でれまばらうと流川の河ふ  
卯月のとゑはくらは葉のあらまとえあらぬ身代  
よと身と金石のりとふらとハ一深大うてひき  
とひくもせふりうりうりふら葉のひめへれ  
政入道がて祝うてととと軍をふりきぬとて移入  
をせは數千方の河と川のねをとすすがるわらひ  
をまもひちとわらひはうきうちととよめうりてを  
うれわづとせうりとせうりとせうりとせうり  
うれうれうれうれうれうれうれうれうれ  
○空空門よ扇とあきまへすをとやうひきの





くよ月日とまうはくわらうく年うじ  
かねどりうきをかうぢくと外あぐ里とくか  
がせんとみうきうぎうううううううううう  
繫仰とうひううううう病ううううううう  
とせ族う位のゆりとふれまほつてつみを合  
りあはうい内う称どりとまえうこうううの安  
きのまでもるまめのむくたうえもうとくく  
くまくまほくまくまくまくまくまくまく  
○板や小室やとひまくまくまくまくまくま  
ふゆひとひとひとひとひとひとひとひと  
りそくおうとあふ人

我でても今をうなねりとくまうん小袖とせ



○平後方御内の家よりおねとて世房を乃ありて平  
とそれへ生氣にうら腹つみちあやとふ醫師の兵と  
うを免給しうとれか堅とてうことはちと後方ほ  
そと免くすめひてうくるて御名もあ

○隠とすものまやかすをいふまじきのあがひえ  
○重臣石見守がおとせぬへき太二ひきとあらうと  
とやく石門某よりすよアモリノグモトカミタハ  
かまひてこひれどろひと

わびとう情する猪のむまにまやうつまとまくま  
重臣はすふをとひねとてうじととせー

のそじとハ舊ニモヒ物也とれとへ年よ若くニ年事

○江別府林院うと日吉多史が能と身一と山山の能

とよ人を教とおとときて主の仕舞わるよ  
まく

○七教とうとけとくま山林作のとあまうりとあくとハ  
八月ナ入東の月アスと度はよ行まうよモミのり  
そのまうき漫うと照うやまとあむうう月秋  
のまうとと文よ面ううとされ

○ち月の経代の急公幕ほの地のうととまうととと年  
○義徳國古は合戦よりまを城郭つゝとはあ  
まれ

○とまそれとめんとあお行のハ被毛をひのゆう  
○今川伊豫入たる後のある日川村をとてゆけま  
ととあたつととそのうどよまをとてとまをあ

やくわうす後も柳の枝を下す。又木の枝とを  
おこうとテ糸の内一チ糸とて生きて年年からむれ  
こまへ主をと持りしるふちとれうあすとす。先  
られうよお門アモドうちハ御宗朝もと意地とほり。寶  
う一首の手とぞられそれせしにうつんとゆてん  
のうをもうう。除スルトモとそ乃手う。

牛かとあらひとやかと薑の枝とハ神より生てきうや  
茎葉のうり一うみせひわきと屋つゝくとやう後  
くわようくひうわくとえ舞。

○薑根川せうえうーはううう大東方波と押さづ  
うてかの家とさの家とがこのよふとくゆう手とく  
けまゐれ

かくくよひやつとくとくとくとくとくとくとくとく  
うりたまやなまじとかーのううと生  
いぬくよくあつまん面白くて喜びくも

わまゆくわあこゑすくやわくとくとく

○尼子ト豊守時アシカニのあよ松坂角マツザカコツはとせお覚えと生  
くう侍ううトは一派ハタケのうはううとゆく門中れりも  
えう瓶壁ボウカイもと森田マツダ強ヨウく西とて桂ヤリの名ナミ人ヒトもと圓カクよも  
て争アシカニととめあ家オサシの才子オサシ小刀サムライと桂ヤリと刀タケと刀タケと  
わきひ松坂マツザカ森田マツダ強ヨウす。またよみうう日とひが先  
聖平セイヒンふ坐スルて松坂マツザカ森田マツダ才子オサシ刀タケととめあ里

むろん人とつうててもあらげ

かく魚の生食れまよも福かうえとつうてやつやま

義田五

義の山にたりまつてみの里え一軒風あてひやくらし  
國中ゆきうるあすされは晴久もじ徳名乃すと  
名主義田ハ波くよゆう

○牛波天えぬねだまよ多年の角きよ眠つてた  
八月六日よ一とびえくわよしひて氣と吐きを亂  
えふ天ぐ下小渦りてやくめりあくめりとあ  
その地のうづくらむきて毒とまくあととくらう  
それくらや八月六日乃おれ爲さうらふてあとどう  
て玉瓶うけまよつまよすあう石あよとハニモ數百

ちとくはうれよあうど數のあがきとれりやう石と  
いふきうくとよらひ合とあう鴨牛の口ふ茶耶と  
百葉とぞうてえの魚よはあておふくとひそり  
年の夜とくひ魚をさげとふまハじかうと  
八月六日ともしきれ

菖蒲茶種とよあふとあふまよ方ふくとまよ  
といふすと茶耶と詠ととや

○思くよ事へん人のゆあようて羽々の食あとう  
とくと一弓く合くとよかとよよとよよとよよ  
乱世とくせはとけたねもく人を毒アガマれあら  
もとて色とよまとあとあとあれきくとくや、とく  
はあて色とよハ佐助也行う色とよとくふく

おもとて御とぞくつ本也又同御とぞくつ本也  
比もくもくもくはせとそとハソヒム也卒焉登るも

3

漢奥れりくらの古事記と云ふとえ

とくもとせとねやとひきうすりあ

○富小須れあ立除坊のひみかにう全福後とてけう  
じづね様とあると女ありそ乃れとくがくとくあり  
まくとかぶうどく股をくほう金福とくとく。全  
福のう。小坐とくとくかくうハ虚勝とくとく愛とく  
さくても布称ハ明神へせ乃聞まつとーされハ明  
神愛よはやうとをゆ称川アセシモウハをみな  
まくとくふくとくとくとくとくとくとくとくとくとく



乞うとひ渡す印アゲルトヒタスシマツ  
わざわやわらか事ワザワヤワラカモノは御内金場ヨウノイキンバウ也  
鬼破事ケイハシモノと云ふ事トヨブモノ也物モノと云ふ事トヨブモノ也  
多岐ヤクニの事モノよし作家ヤクジヤおねオネ役ヨクを取ヒカル事モノ也  
中終チウジン事モノと云ふ事トヨブモノ也事モノと云ふ事トヨブモノ也  
行ウケル

主あり不經よきをなへぬか破滅ま  
○平仲文さへてかよしわらひのあ  
三日やうせめくつては世を  
タムとゆがひとす仲文もこれとくと  
て袖のきもくと女房と玉ひと御ふ  
りりてはとくとくとくとくとくとく

わくよ女房と云ふ事  
ありて多ひりつともう既にこのか  
ら多くへるをれは男どもんとらうてなほるま  
まちがふと女あそびじゆく見ゆるを

鳥毛の枝もわから  
そ続くやうな氣分  
女はうららかにて

墨と毛筆をもとめ、お絵の店よ。草書と  
○筋骨(くつき)にて、そぞろに走り  
あがめぬ。わざと、室(むろ)に  
じきりとす。かくま

アラルトヤ猶太族奥ノアラルト  
アラルトの東方アラルト國とシルギ  
アラルトの北アラルト國とシルギ  
アラルトの西アラルト國とシルギ  
アラルトの南アラルト國とシルギ  
アラルトの東アラルト國とシルギ  
アラルトの北アラルト國とシルギ  
アラルトの西アラルト國とシルギ  
アラルトの南アラルト國とシルギ

て醉ふとあはれとがりきくまわね  
まくらをとひこみかづまとと作さうも  
ぢから小變れまくらのまことあまくよまうらゑ  
くもくみたまふ

これまた神とあはれを因ましゆ醉ひまう  
そくいとくとく年はかうす神とあひてくろとく  
半うとてかねひまくとくとくつわうよひして我後  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
仕あまうまくや  
四文の歌はまくとく神が麻陽とたまをせらうまつえ  
と作さうまうりかわくとまく  
田舎よあざむかゆよかくまのうまくとせまくと  
かゆかゆあれど後わくまくとせまくとまく



わらあわら  
れぬ房をまく  
へ事うとく  
あさご  
わらえん  
とく

教出のまゝや、やがては  
○宣教の事と、内為亨と  
さうはあらうと、お詫びを

門  
也  
一  
也  
也  
也  
也  
也  
也

是經之始與終也

今も楊の名めりか農人のもとあつてうきよ  
てすむれをねむる林よまえまれのう橋乃村ふみ  
の雲深ちひ深よみうちよわうつ雲深のくとく家  
てこくわうくすむ村人集うとれもひがい  
ゆきや雪色ぬじかわくもくわうりはすとせきと  
とよくじれのまきうらくよかく

まよ經冊にやくもひみからえりて  
つれづれとほゆふまうてうづかきの日うねりうづく  
じよきのまうてうづかきの日うねりうづく  
かくはくの本のうづくめづく

もうとみみつ生れりつとすとまうりしと  
母うとみひうる枝えじとびあう風もくらへあむ  
子はうれうれやあうめとるうと  
まうそひうれうれやあうれうれ  
経書をまかくより

福みとあてゆうはれんくまうとせゆ  
○都のわ山ちむとづあく大福の原くくまく  
きくくすくとくふりまきはまくわくとくすくと  
うきくと

ゆうとあとゆうとくに福とがとあよむはま  
きハ花のちくにれまくとそ  
まくとまくとくに大福のまくとそまくとまく

うくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと  
びつまく酒とおとくとくあまくとせだくとまく  
くとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく  
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと  
あとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく  
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと  
○伊勢伊勢守の庭う伊勢福乃とまくとまくとまく  
うとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

まくとまく

井見とみとみとみとみとみとみとみと  
あみとみとみとみとみとみとみとみと  
掌車れりゆきとみとみとみとみとみと  
みとみとみとみとみとみとみとみと

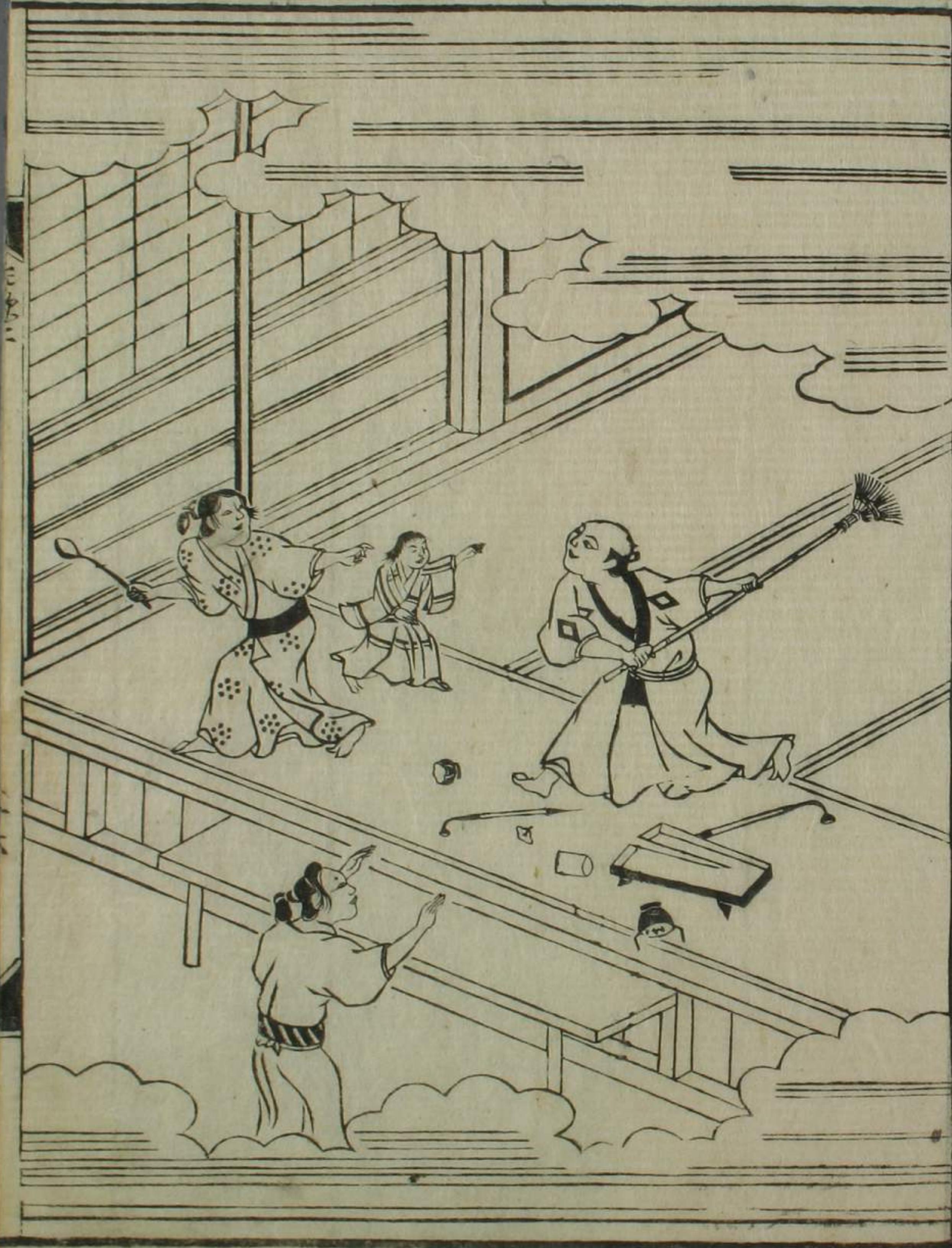
世事あつてかみかづくやうらじてゆきてたりひうる  
人クニとくもと門戸よきつをゆく  
衣そんとまごと煙やわらかくとまちとく  
○薄贋の薫とりて編うるものもへき門戸らと毛  
毛とわらはぬうすとたゞこの毛と鼻  
毛のねとくとてあがくまゆ毛とまふ姪と毛と  
毛と毛とあらわづまく毛と毛と毛と毛と  
毛とあらんよりあ

褐にこま黒と灰くらわきて三色龜毛あらん毛と  
○人あらもとてむよ興じつ興のむちうす網とり  
毛とく料ねとくと辯どらきうるくかく  
うれりと辯をあら褐網

とくの敷毛とくとくちひあ敷ゆうとくや  
品とけすとす乃匍まつくるあら事ゆうとく  
毛とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
えづくやうとて後よハ培げくのきりし大体田舎  
つぐの事あきりとされ石川世而とひけく津み實  
き金のまのうとて富ニ和リ也とひけく筋め實  
と田舎へとれとくとて牛糞屋とくとくとくとく  
毛と毛とくとくとてつづくとくとくとくとく  
毛とれせとれとれとれとれとれとれとれと  
いすよりくやとくとくとくとくとくとくとく  
○九條わくうとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

てとくらひありてあまびてれんとれんとけ  
と隣のへりうきけまうへーとる中よ源氏を  
うのきう

せへ中のそでとくらひをは連と音と漁とあらわす  
こくすかのねつとせあうゆうつとひと後立て  
をふかもあくとあくとあくとあくとあくとあくと  
つすじにとねくらひ戻よあくといふうわくとけり  
やとくさんとくまれとくらひとくまあくわくと  
もくまえのくわくとくまくとくまくとくまくと  
も後へゆうとせわ生いや雪のは脚のうり  
ものとくらひとくまくとくまくとくまくとくまく  
とよあくとよあくとよあくとよあくとよあくと



とぞしもとをもあうとつよじ後くましま  
生ておれてもれりすとけんきけとせす  
生ておれても駿若ねあはまつ日をまくあがほ  
とくみくすみとくにけ

○あくせきあわぎよみやまくまくす二月の大晦  
されど佛事場と縁てきたわくまくすくとまむ

てよみく

○丹波の杵えうまくくもむけふ

○菅善相のむくまくいへんへん索西國の  
あくまくもくもくもくもくもくもくもく

詠うきむちうきうきの氣とお福度とくとくつけ  
きくほほほ瓶井のそ寧府とあきれてくとく  
東北やくはあひさせす御のもあくらりとくとくを  
とくとくたぐりとくとくあ極めの極一乘のくとく  
五福とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
梅とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
天とくにくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

天とくにくとくとくとくとくとくとくとくとくとく



○古風の内裏裏の内紙屋院を野定のありありを  
ある古傳よりなり平野もとそのことやむもとを  
あるうしてあるうてあるうてあるうて紙屋川と名づせよが流  
とよりうじへじうそと紙と唐て墨書がふくと  
どうく紙屋はうれもし宣紙と名づけ角宣命  
きんじ宣命ふくの宣命牛も絶え川も流せばと  
とうとうしゆくと

今こそ乃る紙屋と紙屋川もやふねひがのうと  
内里よもよとして名ともなつて絶れずれからう鄰  
乃よモセ節わう内里と紙屋紫野井松山城  
見影壁そめくら砂とふもあらゆ終るもあらそのせ松  
あらひのあらすれと今もあらひすれと今もあらひすれと

乃は御子の御心を知る事無く  
御心を御心と御思ひする事無く  
御心を御心と御思ひする事無く  
御心を御心と御思ひする事無く

卷之三

志免村の事小野村の柏森

既に、北の山や清麿の前あつてま  
○久松町の小堀村の二町の名、憲行があれと  
その南の清和院とて清和と宝満院をさへに  
かの清とて深見の后明子乃とよひとてやあ  
右涼もとへ知人ふく氏あとさうと  
名と今ゆふせきむとほそとれあわと  
○奥國の河東町とて名とてよしわふ  
あり日がとよすよ桂川とみ鶴川ありと  
平岡よきうとけ川とよ源氏のあれとての夜  
のゆの石のほろ井川の宵とよとじわつと  
光復朝にひす

此乃其一也。故曰：「知者不惑，仁者不憂，勇者不懼。」

上卷之序也

中、乃ち、かくして、おもむろに、

東北の時西郊の山

乃東の久よきの是とてす。ありてよし。一義。乃東  
をうひ。はく。寛年は室。延喜。第一。存よれり。

蒙古文

うきかわくわくとくわくくわく  
うきびうきびうきびうきび

貝原先生述  
堪忍言

半紙本  
全部四冊

かく  
かく

也。是之謂  
也。是之謂

此書をば見る孔子子張との事に忍の字と云ふ  
がすむとぞ。忠の二字れ心とられて固とたまうがとくのへ  
やまとかくし。見女子よいあめうて見  
たまうやう。忠孝最古の名ももうすこちうき  
二字ふちうる。とおうろく書く。此をえどすとまほく  
りふはるも。の種。もやくとくとうすの  
あら手本もと。書林とて  
**書林**  
大阪心齋稿筋安堂寺町

書林

秋田屋太右門板

大阪心齋稿筋安堂寺町

